



Title	後方羊蹄山（マクカリヌプリ）の植物分布状態に就きて
Author(s)	西田, 彰三
Citation	札幌博物学会会報, 4(1), 31-42
Issue Date	1912-09-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/60849
Type	article
File Information	Vol.4No.1_006.pdf



[Instructions for use](#)

後方羊蹄山(マクカリヌプリ)の植物分布状態に就きて

西 田 彰 三

On the Distribution of Plants
on Mt. Makkarinupuri.

By

SHŌZO NISHIDA.

緒 言

後方羊蹄山は本道史上の名山なり、而も所産植物の豊富なると交通の便に據ること全道諸高山に冠たり。従て有志の本山に植物採集を試むるもの頗る多し。余は明治三十九年八月故恩師莊司萬六氏に従つて初て本山に登り、其植物分布状態の特異なるに注意し、爾來これが調査をなさむことを企て、明治四十一年宮部博士に従つて再び登山し、以て第二回の調査を遂げ、略其要を得たり。明治四十四年八月大野博士に従つて三たび本山を探り、やゝ其植物分布状態を詳にするを得たり。即ち録して同好の参考に供せんとす。然ども、本山山域の廣大にして分布区域の多様なる、調査の完璧は本日に得て望むべからず。須く後日の探險調査を待ちて修補するところあるべし。

本篇題して後方羊蹄山植物分布状態となす。由來本山名の和稱に關しては區々の論議あり。曰く、羊蹄山、真狩岳、後方羊蹄山、蝦夷富士と其何れを是とし、何れを非とすべきかは茲に評論するの餘白を有せず。余は只而かく信ずるが故に斯く題せるのみ、これが理由と論評とは後日の發表を待つべし。

本山の高度亦區々たり。従て垂直分布に於ける高度の標準を定む

ること頗る難事なり。依て本編は北海道廳最近の調査にかゝる1943米突(6470尺)を取り、中間高度は前後三回に渡る空盒晴雨計による測定を基礎として推算せり。

余は本編を草するに當り懇教を辱ふせる、宮部博士、大野博士、半澤學士、伊藤學士、並に學友近藤金吾君に謹謝し、又諸般の便宜と助言とを與へられたる蝦夷富士登山會幹事高山萬次郎氏並に小樽區星野三郎氏に謝意を表す。

茲に悲むべきは恩師莊司萬六大人の今や幽明境を異にし、本篇成るの喜を共にし、感謝の意を表する機會をして、永遠に有せしめざることを、只々謹て靈前に呈す。

地 理

後方羊蹄山、一名蝦夷富士は土人の所謂 マクカリヌプリ(海拔1943米突)にして、北緯42度50分東經140度48分膽振國虻田郡に在り、本道西南部に於ける最高峯なり。山容端正なる缺頂圓錐形にして、裾を四方に引き、北は傾斜38度にして俱知安高原に連り、東は32度にして目名原野に接し、南は30度にして マクカリベツ 原野となり、西は傾斜やゝ緩にして28度、比羅夫臺地に向ふ。山麓は東北西の三方 シリベツ 河環圍し、南西 マクカリベツ 河流れ、二水合して西流し山峽を破りて、後志灣に入る。故に山域自然に兩流によりて限界せらる。

比羅夫口(西口)山麓に一小湖あり形半月狀をなす、これを半月湖となす。湖の周壁傾斜35度周圍一里餘倒圓錐形狀をなす、これ即ち太古に於て爆裂せる寄生火山口なり。絶頂に三個の舊噴火口あり。

大噴火口は周圍約1里18町、直徑約1000間、深さ100間、東南の二面は峨々たる安山岩質熔岩よりなり、其傾斜30—38度、下るを得べくして上るに容易ならず。北は30度西は更に緩にして26度、北及西の内壁に岩石の露出少なく粉碎岩よりなるを以て、昇降容易なり。

口底は圓形にして直經約70間、八月初旬迄は瀦水あるも中旬蒸發し去りて大磐磊々たるの上僅に御手洗的瀦水を見るのみ。更に口壁の頂上を一周せんか。西壁頂上一の小賽の河原あり、これを中靈臺となす。蝦夷富士山頂、噴火口内部の壯觀を一眸に集め、中、小の火口も亦指呼の間にある。中靈臺より右廻り西南に向つて進まんか、馬背を上りて南門臺あり。東南壁上は寄峰亂出し石尊岳、天狗岳、鎗が岳、或は劍峯をなす、此間或は岩を跳ね、或は怪岩の間を通じて、遂に東北方陸地測量部三角標に達す。これを越て蝦夷富士頂上最高峯北鎮岳1943米突に達す。更に北に下らんか望旭臺となり、遂に中噴火口上の北門臺に達すべし。

中噴火口は、其口壁周圍凡4町30間、底面圓形にして其周圍約10間、中央に安山岩質熔岩の大塊磊々たり、岩脚瀦水を見る。

小噴火口は、口壁周圍約3町30間にして、甚だ淺し。下底に瀦水あり、多く白どほろを産す、これをゐぐさが池となす。

本山は其外壁に於て數多の穴澤を有し、其走向によりて各特異の植物區景をなす。海拔約1800米突にして一大緩傾斜地あり、初夏の候百花爛熳黄紅白紫を競ふ、これを御花畑となす。中に小湖あり、不斷の水を瀦ふ、雲泉湖と云ふ。湖畔の巨岩磊々たる間綴るに珍花をもつてし、自ら小公園をなす。西門臺下一小溪あり、御花畑入口より右折し約9町にして達すべし、溪間の小流瀦して長池をなす、池中にほしみどろを産す、星が池と稱せらるゝも奇なり、池畔亦獨特なる植物景觀を見る。南門臺下、下ること約300尺にして又澤あり、分れて三小澤をなす。八月中旬尙殘雪を見多くみつばわうれんを産す、これを藥草が原と名づく。三角標より第二番溪を下ること約1000尺にして一大緩傾斜地あり、本山中第一の御花畑たりこれを靈岩公園と云ふ。

植物數及び植物帶

後方羊蹄山は交通の便に據ること全道諸高山中第一に位す。従て本山に植物採集を試むるもの最も多く、茲に擧るの餘祐を有せず。只本山所産の植物にして既に記録せられたるもの

明治二十八年マツカリヌプリ氣象観測記	24科	47種	水科七三郎氏 戸津 高知氏
明治三十八年植物學雜誌第十九卷第二百二十七號マクカリヌプリ植物	44科	96種	栗野宗太郎氏
同年本會會報第一卷第一號、マクカリヌプリ山頂植物	35科	77種	半 澤 洵氏
明治四十五年宮部博士就職二十五年記念論文集 同目錄の補遺		24種	同 氏
明治四十二年高山植物採集及培養法、中にマクカリヌプリ山植物目錄	28科	64種	志村 島嶺氏
明治四十四年文武會雜誌第六十四號蝦夷富士の花	42科	109種	近藤 金吾氏
明治四十五年宮部博士就職二十五年記念論文集蝦夷富士山頂に於ける山火後發生せる植物に就て	7科	14種	同 氏

本篇に記載せる後方羊蹄山所産の植物數は顯花植物66科230種隱花植物6類35種總計265種を計せり。

植物帶 マクカリヌプリ山麓シリベツ河マクカリベツ河界限は、マイル氏の所謂第三帶(落葉潤葉樹帶、山毛櫸帶)に屬し、1200尺の駒返附近に及び。1200尺以上は、第四帶(針葉樹帶、樞松帶)に屬すべきものにして、中腹以上4000尺に達し。其主木はぬぐまつ、とどまつにして、なゝかまど、うだいかんば、むしかり、等の潤葉樹種を混ぜり。4400尺以上頂上迄は、第五帶(樞松帶)にして、4400尺の峰背及び5000尺迄の溪谷は上方潤葉樹林(樞木帶 主木ぬぐのたけかんば)を現はし、以上は純然樞松帶にして頂上に及べり。純然たる草本帶は、本山に於てこれを見る能はずと雖も、6000尺以上6470尺の山頂に達する間に於て樞松帶に交雜するものを見るを得べし。

植物配布の状態

本山の植物配布状態を見るには、現今唯一の登山口たる比羅夫口(半月湖畔)よりするを可とす。往時登山道の開鑿今日の如くならざりし際は、登山者の多くは目名口(目名原野)カシユブナイ川上流たる一條の穴澤を利用せり。されど其傾斜實に30度、比羅夫口25度乃

至28度に比し、やゝ急峻をきはむ。而して函檜鐵道の開通と、蝦夷富士登山會の登山道開鑿とは、此比較的緩なる斜面利用をして復活せしめ、遂に今日の盛況を見るに至れるものなり。以下比羅夫口より觀察したる本山植物の垂直分布を述ん。

半月湖畔(800尺)より駒返し(1200尺)に至る沿道。

あおだも、いたや、うだいかんば、おほなら、おほばほだいじゆ、くは、おへうだも、おにぐるみ、こぶし、さはしば、しなのき、しうり、きはだ、しらかんば、せんのみ、とちのみ、なゝかまど、ほゝのみ、みづき、むしかり、めいげつかへて、やまはんのみ、等の潤葉喬木の鬱蒼たる間とどまつの混生するあり。樹下に見る灌木の重なるもの、こまかだけすぐり、おがらばな、いぬがや、いぬつけ、おほばすのみ、のりのき、等にして、樹間を縫ふてやまぶだう、こくわ、等の攀縁するあり。樹幹に纏繞するもの。

つたうるし、つるあぢさゐあり。樹下に見る草本の重なるもの。

あかそ、うど、むぎにう、むぎのみつねあざみ、えんれいさう、おほばいらくさ、えぎのよつばむぐら、おほばうばゆり、おほばいたどり、かうがりな、きつりふね、くるまゆり、くさそてつ、くるまばつくばねさう、くされだま、くるまばさう、こんろんさう、さいばらん、さらしなしようま、さはあぢさゐ、とちばにんじん、なつゆきさう、ながじらみ、はんごんさう、はなうど、ひよどりばな、ひとりしづか、さんかえふ、めうま、まひづるさう、みやまとうばな、むかごいらくさ、みやまたにたて、やぶたばこ、ゆきざさ、よぶすまさう、れんぶくさう、やなぎらん、つるりんどう、つくばねさう、おほうめがささう、うまのみづは、よもぎ等黄紅白紫樹下岩際を飾るを見るべく、ねまがりだけ、路傍を埋むるの間を縫ふて進む。

駒返し(1200尺)、急坂これより起る、崎嶇たる岩際を縫ふて、羊腸十

八曲折、蘚苔滑なる處既に針葉喬木林裡に入る。

とどまつ、えぞまつを主とし、濶葉樹の其間に混生するもの、いたや、うだいかんば、おがらばな、おほばやなぎ、しうりざくら、なゝかまど、みねかへで、むしかり、ひろはにはとこ等の喬木、小喬木を見るべく蔓木及灌木の岩際に立つもの、のりのき、あかみのいぬつけ、こまがだけすぐり、むらさきやしほつつじ等にして、いはがらみ、つるあぢさるの樹間岩角に攀縁するを見るべし。草本の重なるもの。

うど、おほばたけしまらん、おほばいらくさ、おぞにう、ぎようじやにんにく、さはあぢさる、さらしなしようま、しらねあふひ、たけしまらん、てんなんせう、とちばにんじん、なつゆきさう、まひづるさう、むかごいらくさ、よぶすまさう、るゐおふぼたん、るゐおふしようま、やまぶきしようま、あまちやづる、にして、岩際の陰地に生ずるもの、みやまたにたで、みやまかたばみ、れんぷくさう、づだやくしゆ等紅白の小花を綴るの外、多く羊齒類を産す。

じうもんじしだ、とらのをしだ、くじやくしだ、いわがねさう

四合目羽仙閣(2300尺)、に達すれば樹種も其數を減じ包圍のえぞまつ、天に柱するの間いたや、うだいかんば、えぞのだけかんば、ねがらばな、なゝかまど、等の濶葉喬木小喬木其間に點綴し、ねまがりだけの下交ふるに、あかみのいぬつけ、おほばすのき、つるつけ、みやましきみ等を以てし草本の種類甚だ多からず。

あきのきりんさう、おほばこ、みやまたにたで、ひとりしづか、やなぎらん、

みかへり松(4000尺)に達す。但し蝦夷松の巨木にして畸態他に述むべからず。此邊喬木帶の終點と思はる。針葉喬木漸次其高さ太さを減しえぞのだけかんば代りて勢力を得延々大蛇の伏せるが如きを見る、即ち上方調葉林(雁皮帶)とす。急坂直上天を臨んで登るの

間、あくしば、いちぬ、(おんこ)うこんうつぎ、紅ぞのたけかんば、おがらばな、おほばすのき、こしあぶら、あかみのいぬつげ、ちしまざくら、つるまさき、ななかまど、つのはしばみ、みねかへて、むらさきつりばな、むしかり等の小喬木灌木を見るべく樹下に綴る草本には。紅ぞす、ずらん、あきのきりんさう、いはつつじ、うすばさいしん、紅ぞふすま、えすのよつばむぐら、たにききやう、はうちやくさう、まひづるさう、みやまえんれいさう等を主とし時にしやくじやうさうを見ることあるべし。

偃松帯(1400尺)、えすのたけかんばの老幹延々峻坂に横はり、蝟雁皮、腰掛雁皮、或は鳥居雁皮の崎態百出するの邊、既に偃松帯に移る。これより七合目、胸突參丁(5000尺)に至る間、樹本の重なるもの、あくしば、うこんうつぎ、おがらばな、おほばすのき、紅ぞのたけかんば、ちしまざくら、はひまつ、みねかへて、みやまななかまど、みねやなぎ、むしかり等にして、樹下の草本には、

あきのきりんさう、いはつつじ、うすばさいしん、紅ぞのよつばむぐら、おほばたけしまらん、からまつさう、こすぎらん、こけもも、ごえふいちご、とうげしば、なつゆきさう、みやまたにたて、みやまかたばみ、電光坂(5300尺)、再び羊腸曲折五十三回の峻坂、所謂電光坂に出づれば、溪谷分布の景觀を見るを得べく。

うこんうつぎ、紅ぞのたけかんば、ちしまざくら、はひまつ、ほざきな、ななかまど、みねかへて等の樹下、あきのきりんさう、いはべんけいさう、おほかさもち、あわもりしようま、きばなしやくなげ、ぎようじやにんにく、こけもも、いはつつじ、ごえふいちご、ちしまふうろ、まるばのひれあざみ、よぶすまさう、からまつさう、

等美なる高山植物黄紅白紫を競ふを見る。急坂盡くるところ、

御花畑入口(5800尺)、に達す。はひまつ密生する間みやまななかま

ど、うこんうつぎ、きばなしやくなげ、はなひりのき、ちしまざくら、おほばすのき、等を混生すべく、草本の重なるもの、

あきのきりんさう、あわもりしようま、いぶきぜり、えぞにう、おほかさもち、からまつさう、ぎようじやにんにく、さんかえふ、まるばのひれあざみ、まひづるさう、ちしまふうろ、やまははこ、

御花畑(6000尺)所謂神苑に達すれば、雲泉湖畔百花爛蔓の莊觀に接すべく。

あきのきりんさう、あらしぐさ、いはべんけいさう、いはおとぎり、いぶきぜり、うらじろたて、うこんうつぎ、えぞのつがざくら、おほやまふすま、からまつさう、きばなしやくなげ、ごぜんたちばな、ごねふいちご、さまによもぎ、しらねあふひ、つまとりさう、なつゆきさう、ひめいらげ、ひろはのひめいちげ、ちしまふうろ、まるばのしもつけ、みやきんばい、みやまななかまど、みやまがりやす、うめばちさう、まるばのひれあざみ、こけもも、

等黄紅白紫羣緑を點綴して岩角を飾る。更に山頂宿泊所雲表閣背後の斜面を探らんか、

あらしぐさ、いはおとぎり、いはべんけいさう、いぶきぬかぼ、うめばちさう、うこんうつぎ、うらじろたて、おやまりんだう、くるまゆり、さまによもぎ、ちしまふうろ、しらねあふひ、はくさんちどり、まるばのひれあざみ、やまははこ、あわもりしようま、おだまき、みやまひかげのかづら等を見るべし。雲泉湖より、頂上噴火口に達する急坂、左に偃松の燒跡を登ること2丁の間岩際に、

えぞのよつばむぐら、たにききやう、ごぜんたちばな、ごねふいちご、を見るべく。路傍の樹下に、あわもりしようま、いはおとぎり、うこんうつぎ、えぞふすま、さまによもぎ、ちしまふうろ、なつゆきさう、まるばのひれあざみ、みやまひかげのかづら、みやまななかまど、みやま

かたばみ、れんぶくさふ、まるばしもつけ、あきのきりんさう等美花を付くるあり、偃松の焼跡には、

みやまななかまど、やなぎらん、あきのきりんさう、ごぜんたちばな、等の既に發生せるを見、ぜにごげ、ほそすぎごげ、の群落所々に點存す。

更に未焼區域より焼跡に浸入するもの、こけもも、きばなのしやくなげ、うこんうつぎ、等あるを見るべし。道盡きて、

神笛溪に出づ、巨岩點在するの濕地あきのきりんさう、いぶきぜり、いはおとぎり、うこんうつぎ、ぬいらんたい、おやまりんだう、おほやまふすま、がんこうらん、くるまゆり、こけもも、ごえふいちご、さまによもぎ、ちしまふうろ、はなごげ、つめごげ、まるばしもつけ、うめばちさう、みやまきんばい、みやますずめのひえ、みやまひかげのかづら、せんぼんやり等を得べく、偃松の樹下愛らしき、りんねさう、を見ることあるべし。

大噴火口(6200尺)、神笛溪より中靈臺に登れば大、中、小の火口並列して、指呼の間にあり。即ち大噴火口より漸次採集を試みんか、中靈臺の附近礫砂推積する處、

いはぶくろ、いはききやう、うらじろたで、ほそばおんたで、きくばくわがた、みやまきんばい、等の乾性高山植物景觀を現出すべく、中靈臺より右廻り、馬脊に登り南門臺に至る間の大噴火口壁上、あきのきりんさう、いはおとぎり、いはききやう、いはべんけいさう、いははたぎほ、いちやくさう、うめばちさう、うこんうつぎ、えぞつがざくら、おやまりんだう、おほかさもち、がんこうらん、くろうすご、こめすすき、こすぎらん、こけもも、さまによもぎ、たかねぬかほ、ちしまふうろ、はくさんちどり、みやますずめのひえ、みやまひかげのかづら、みやまたねつけばな、みやまくろすげ、りんねさう、きんすげ等を産し、就中たかねとんぼを珍とすべく、岩頭岩角を點綴するもの、いはう

め、いはひげ、いろうすげ(新稱)こめばつがざくら、だいもんじさう、みやまいちごつなぎ、くろうすご、れぶんくろすげ(宮部博士新稱)等あり。

これより南壁、巒峰群立するところの、岩角を綴るものには、いはぶくろ、いはうめ、いはひげ、いろつつじ、こけもも、みやまはんせうづる、だいもんじさう、くろうすご、等を見るべし。

更に中靈臺より左廻り、偃松の焼残する間を登り、三角標に達するの間、

あきのきりんさう、いはうめ、いはひげ、いはおとぎり、えぞつがざくら、みやまおだまき、がんこうらん、きんすげ、くろすげ、こめすすき、さまによもぎ、ちしまふうろう、たかねすみれ、はくさんちどり、はりすげ、みやまくろすげ、みやまはんせうづる、みやまいちごつなぎ、りんねさう、いぶきぬかぼ等を見るべく。巨巖磊々たる間しこたんはこべ、たかねあざみ、(紅うふじあざみ)(新稱)等の珍品を得べく。岩陰や、濕性の點、ちしませきせう、ちしまらつきやうを得べし。

大噴火口底、直下1000尺大噴火口底に下らんか、巨巖の下あらしぐさ、いははたざほ、うめばちさう、みやまおだまき、たかねすみれ、ちしませきしやう、しこたんはこべ、ひめみやますみれ、みやまたねつけばな、ちしませきしやう、みやまくろすげ、おのへりんだう、うつぼぐさ等を見るべく。南壁岩下陰濕の地多く地衣類を産し、ちしまきんれいくわを産すること多し。

小噴火口、小噴火口は大、中、噴火口の間中に座す。面積甚だ小なれども、珍品に富む。口底一小池あり、えぞほろゑを産す。たかねおみなへし、(ちしまきんれいくわ)を珍とすべく、

あきのきりんさう、いはおとぎり、いはぶくろ、いははたざほ、おのへりんだう、みやまおだまき、くじやくごけ、こめすすき、さまによもぎ、

ほそすきごけ、ほろばおんたて、ちしまふうろ、ほうらいさう、みやま
すずめのひゑ、めあかんきんばい、みやまきんばい、紅ぞほろゑ等密
生す。

中噴火口、小噴火口の北に接して存す、口底不斷の水あり、水底多くの
蘚類及けろほそゑを産す、水邊巨岩磊々たる岩角いはうめの簇生
するを以て特異とす、其他岩角を飾るもの、

えすのつがざくら、こけもも、こめばつがざくら、みやまきんばい
あり。口壁にいはぶくろ、おのへりんだう、きばなしやくなげ、ごぜん
たちばな、さまによもぎ、ちしまふうろ、ひめいちげ、ほそばおんたて、
まるばのしもつけ、等を産し特に蘚類を産すること他に冠たり。

薬草が原、薬草が原は明治四十一年八月蝦夷富士高山植物講習會
開設に際し、余等會員の探驗發見するところなり。所謂南門臺下よ
り偃松林を直下すること400尺乃至500尺溪谷分かれて三條をな
す、みつばわうれんを産す、薬草原の名これより起る。

第一溪、あらしぐさ、いぶきぜり、うめばちさう、おほかさもち、きばな
しやくなげ、くろうすご、こいちねふらん、しろばなにながな、うつぼぐ
さ、ちしまふうろ、ちしまきんぼうげ、みやまきんばい、みやまやなぎ
等の珍品を見るべく。第二溪に入れば八月中旬尙殘雪を見る、流れ
に沿ふて下らんか、いはいてう、みつばわうれん、最も多く、

あらしぐさ、うめばちさう、きばなしやしなげ、きんすげ、みやまやな
ぎ、みやまくろすげ、しろばなにながな、はくさんちどり、こいちねふら
ん、ちしまきんぼうげ等點々岩際を飾り、第三溪に達すれば、あきの
きりんさう、うこんうつぎ、きばなしやくなげ、くろうすご、ちしまふ
うろ、しらねあふひ、はくさんちどり、を産す。

靈岩公園、三角測量標より第二番溪を下ること、約9町の地點にあ
り、出口理學士の發見にかゝる。本區域は山中最も大なる御花畑な

れども、同氏以來未だこれを探検せるものあるを聞かず。

ちんぐるま、を産すること、出口學士の採集によりて知らる。

星が池、御花畑入口より下ること約9町にして星が池に達す。池中
ほしみどろを産するも寄とすべし、池邊の植物景觀も亦自ら獨特
のものあり、いはいてふ、たかねすみれを珍とすべく、

あらしぐさ、いはべんけいさう、いぶきぜり、いぶきぬかぼ、うすばさ
いしん、うめばちさう、うこんうつき、えそほそゐ、むいらんたい、うら
じろたて、おのへりんだう、かうぞりな、みやまおだまき、しらたまの
き、あかもの、きんすげ、きばなのしやくなげ、くろうすご、ごえふつつ
じ、さまによもぎ、ちしまふうろ、みやまくろすげ、しらねあふひ、はな
ごけ、はくさんちどり、ひめくわんぐう、みやますずめのひゑ、みやま
やなぎ、みやまひかげのかづら等其周壁に叢生するを見るべく、岩
角の間いはぶくろ、こめばつがざくら、だいもんじさうの綴るを見
るべし。

本山植物目録は紙面の都合あれば次號に譲る。